



「死」から「生」へスイッチ切り替えて

がんは進行していた。「誰からも哀れみだけは受けたくない」と、ひたすら再発しないことだけを祈

動いた。母性が私を導いた。乳がん患者会「あけぼの会」(現あけぼの滋賀)に行

つてみた。真綿のようなぬくもりが、わかってく

仲間に出会うために月に1回開かれていた「あけぼのハウス」、県内7病院内の「がん患者サロ

で札幌に向かった。深夜、車窓に映った顔は年月を感じさせるものだった。でも、これが生きてきた証なのだ。入院中、ベッドでびよんびよん楽しんで跳ねていた息子が明朝、札幌で待っている。(滋賀県がん患者団体連絡協議会会長)

分かってる。「生あるものは必ず死せり」と分かってはいるが、37歳でのがん告知は青天の霹靂だった。「まさか私が…こんな人生悲しすぎる」。だが現実を受け入れざるを得なかった。それが「がん」なのだ。

乳房全摘術、抗がん剤、ホルモン療法、放射線治療、ステージ3Aと私の生が終わってしまう」と再度奈落に落とされたが、「母として何としても生きたい」と強く心が



菊井 津多子



イチョウ並木が美しい札幌市内で長男と再会した筆者(11月1日)

ていた私の心を冷静へと導いてくれた。頭の中を占領していた「死」が「生」に切り替わり、再発がんと向き合い方を百八十度変えることが出来た。そして今私は生きてい

今ひとりでがんと向き合っているあなた。勇気を出して一歩踏み出して。きつときつと違う人生があなたを待っているでしょう。寝台特急トワイライト

に加わります。きくい・つたこ 大津市在住。がんサバイバー。乳がん患者会「あけぼの滋賀」代表。2008年の1年間と10年から県がん患者団体連絡協議会の会長を務める。